

〈資料〉

# 『小野篁八十嶋かげ』巻之三

——翻刻と解題——

岡本 夏奈

Reprint and Introduction of "Onono Takamura-yasoshimakage" Vol. 3

Kana OKAMOTO

## 【解題】

読本『小野篁八十嶋かげ』は、文政二年（八二〇）に全八巻十冊本として刊行された。合本版である国立国会図書館本（文政二年刊／全八巻二冊）を底本として、巻之一は『昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要』二十五号（平成二十八年三月）、巻之二は『昭和女子大学文化史研究』十九号（平成二十八年三月）に翻刻紹介した。本稿では巻之三を翻刻紹介する。

巻之三は小野岑守が藤原種忠暗殺に関する一連の出来事に思いを馳せる場面から始まる。早良皇子が自身を罵りながら死んだという噂を耳にした岑守は、子孫が崇られることを後ろめたく思い、神仏の御利益を得るために嫡子である筑後守葛絃君を比叡山へ詣でさせる。ところが葛絃君が不動堂に詣でた後、下り松を過ぎたところで一行は嵐に遭遇する。

雷雲の間から白い袍の束帯姿で恐ろしい顔をした男が現れて葛絃君を睨みつけると、葛絃君は馬上にて倒れてしまう。付き人の介抱を受けてなんとか帰郷するが、夜中に悶え苦しみ、終には亡くなってしまった。岑守は葛絃君の死は早良皇子の怨霊によるものだと考え、跡継ぎを授かる

ために興福寺の賢憬上人に法華鐵法を頼み、自身も求聞持法を行う。すると満願の夜、岑守の北の方である榊の上が夢を見る。北斗七星の天罡星が地上に落ちて四、五歳ばかりの美しい童子となり、童子が竹林に入ろうとするのを追って抱き上げて年齢と名前を尋ねると、童子は「父母はおらず名前もない」と答え、自身を養育するよう告げる。榊の上は童子を自身の子とすることを了承し、翌朝岑守に夢の話をする。延暦二十一年（八三三）正月、麗しい若君が誕生すると竹村と名付けられ、大切に育てられた。竹村はあつという間に成長し、その賢さは三歳で学舎に行くほどであった。人々から竹村を美しいと褒められたことから、岑守は竹村の名を篁に改め、様々な教育を施した。

篁が三歳になった年に榊の上は再び身籠り、翌年春に姫君が誕生した。岑守は姫君を繁艸と名づけて喜びつつ、その行く末を案じて宿曜師に相談する。宿曜師は繁艸を手元で育てたならば成人したのちに死霊の祟りによって命を落とすと告げ、洛外に捨てるよう助言する。榊の上は歎くが、岑守は葛絃君の死を思い、左衛門宗友に繁艸を捨てるよう指示した。

ある年の七月、篁は廊に落ちていた文を拾って岑守に渡す。文は宗友が侍女右近へ贈ったもので、二人が恋仲であることを知った岑守は暇を出すことを決める。一方で右近も頻りに暇を願っており、それを訝しんだ岑守は暇を出した後には右近の様子を伺わせると、宗友との間に女兒が生まれたことを知る。繁艸のことを忘れられない神の上はこの女兒を繁艸として育てることを決め、宗友と右近に金を与えた。両者は神の上の恩を心苦しく思い、館を離れる。

小野邸を離れた宗友と右近は、大江にて漁をしながら穏やかに暮らしていた。しかし次第に家計が苦しくなり、宗友は遠山鷹蔵という富豪に三十両を借りることを決める。右近に懸想をしている鷹蔵は、宗友が留守にしている間に右近へ自身の気持ちを伝える。右近は鷹蔵を穢しく思うが、次男佐太郎をいたぶられ、また金のために強く出ることができず、これも主君からの罰と思い、鷹蔵が持ってきた金を夫に渡したら命を捨てる覚悟をする。帰毛した宗友が右近と鷹蔵が部屋奥へ行く姿を目撃して声を上げると、右近は剣で自害しようとする。しかし宗友によって失敗に終わり、事の次第を知った宗友は右近の貞節に感歎する。鷹蔵はその場から逃げようとするも行き場がなく網に隠れるが、それを見つけた宗友は網に人魚がかかっていると声を上げ、見せ物にしようか、食べようか、それとも貴族に売り渡そうかと話したのち、百両出すなら命を助けようとして提案する。百両も出せない鷹蔵は宗友に交渉を持ちかけ、三十両で決着する。しかし宗友に対して怒りが収まらない鷹蔵は帰る際に宗友を殴ろうとするが返り討ちにあい、廷尉監に訴えるも、日頃の行いによって宗友の証言が相違なしと判断されて大江を追放される。宗友は右近と佐太郎を大江に残して都へ行き、のちに妻子を都へ迎えようとする。しかし成長して梶八と名を改めた佐太郎は大江に残り、船長として生活した。

さて、『小野篁八十嶋かげ』の主人公である小野篁が誕生するのがこの巻之三である。篁の出生譚はいくつかの系統があるが、その名にちなんで竹に関するものが最も多い。『小野篁八十嶋かげ』で語られる篁の出生譚は「求聞持法」「天罡星」「竹林」の要素が含まれており、『一乗拾玉抄』（長享二年（一四〇〇））巻六、『古今抄延五記』（延徳四年（一四三三））月二十六日藤原憲輔へ授与）巻第九、『法華経鸞林拾葉鈔』（永正九年（一五三〇））巻十八、『百人一首拾穂抄』（天和元年（一六六〇））などに記されたものと類似している。

求聞持法の「求聞」とは見聞覚知のことを憶持して忘れないという意味であり、一定の作法に則って真言を百日間かけて百万回唱えた行者はあらゆる経典を記憶し、理解して忘れることがないという。『日本文徳天皇実録』（元慶二年（八七〇））仁寿二年十二月二十二日条や『本朝文粹』（長曆・寛徳頃）巻七などにおいて篁の才が優れていることは語られているが、その理由づけとして求聞持法が取り入れられたと考えられる。

天罡星は破軍星のことで、北斗七星を剣に見立てたときに剣先に位置することから、その方角は万事に不吉なりとして忌まれた。篁は『下学集』（文安一年（一四四四））序巻上、『京師巡覧集』（延宝七年（一六三九））巻之三などにおいて破軍星の化身と記され、石原昭平氏は、破軍星の化身であることが冥官としての素質であると論じている<sup>1</sup>。また、篁を破軍星だけでなく文殊菩薩や閻魔王の化身とする説もあり、その多様さには小野篁という人物の特異性が現れているといえる。

「篁」という文字は「竹林」の意を持つ。竹は卓越した成長力・生命力、竹節（空洞）などの特殊な形状を持っており、古くから神秘的な力が宿る植物と考えられてきた。作中、篁の成長が早い理由を岑守と神の上は北斗の化身であるが故と考えているが、むしろ竹の異常な成長速度を示しているといえる。

人の生まれと育ちは、その人物がどのような力を持っているのかを推察する材料となる。巻之三では篁のほか繁艸、佐太郎(樞八)、下枝が誕生している。特に佐太郎と下枝は巻之二冒頭の挿絵にも描かれており、読者に対して今後の活躍を暗示させている。

〔注〕

1. 石原昭平「篁説話の形成―文人と冥官―」『解釈』十一月号(昭和四十七年十一月 教育出版センター)。

〔翻刻凡例〕

1. 国立国会図書館蔵『小野篁八十嶋かげ』(文政二年刊/全八巻二冊)を底本とした。縦二二・五×横一五・一冊。袋綴装。色紙表紙に「小野篁一代記 八十嶋かげ」の刷題簽がある。
2. 原文を尊重し、字体、清濁、句読点、ルビは原文のままとしたが、合略仮名や繰返符号は通行の表記に改めた。
3. 行取は紙幅の都合で無視したが、改行は／、改丁は「〇1オのように示した。
4. 虫損・汚損によって判読できない箇所は□を置いた。

小野篁八十嶋かげ巻之三

○第七回 たけの子

却説小野岑守卿は。種忠卿を友と善れば。反逆人征討の凶計を商議せしに。豈真種忠卿は。刺客のために卒害せられ給ひぬれば。いまは翅を没ひたるがごとくなりしかども。却てその因縁に。謀反人露頭せしかば。扱こそ刃に血糝ずして巨賊は喪失たり。これひとへに種忠一個の命を傾して。許多の劍戟死囚に質しは。まこと忠義の肝膽。比ひなしとぞ賛歎す。そのうへ奥刃の夷敵もことごとくく埒たれば。今は世も平穩なりと。枕を高うして寝といへども。早良皇子謫所において。我を罵り憤激して。死給ひしとの風論なれば。わが家の昆裔にや崇りなんと。影獲おもひ屈し。つねに神佛を信じ給ふに服て。嫡子筑後守葛絃君を。和弼金峯山に詣させし〇1オ

んとおぼすに。かの山上権現と申は金割藏王にて。過去は釋迦。現在は観世音。當來導師は弥勒なれば。自他の利益もあるべきながら。御嶽精進とて。千日齋戒して後まゐることいへば。朝廷の御暇も恐し。其上葛絃君は。ことし産れたまふ若君。岑守の孫なり後に道風といふ登纏し給へは。とても齋にはえ耐まじければとて。御嶽を輟て比叡山に詣しめたまふ。葛絃君は家君の令命に沿ひ。左衛門宗友の外は供奉の人を減じ。夙朝に出たまふ。きよらに着なせし棟棠の直衣も。春の日の優艶なるに乘じ。横川四明飯室などはいふもさらなり。諸堂回峰するに。山深ければ千鳥も、鳥の囀る。そが中に就て立別れゆかたつきしらずもと。なに子鳥鳴なへに。經読鳥は所からいと憐なり。遅きさくらの爛熳たる一木。看々片枝より綻び佳り。雪を謠かんとするに。花の散し〇1ウ

をば恨まじ。わが身も俱に世にあらんものかはと。口号たまへるは。實忌はしき兆なりけり。雲母阪より山を闌。不動堂に詣て後。馬徴れ

し／低幹松を過給ふころ。驟乎にかめしう風籟出し。一塊の雲。

墨を流せる／が如き。坤の分野より來かとするに。□に迄くなり雨も

強く。逆風石／風。馬も□で勸まねば。鑣面に把縫る。狙守奴も妖

とおもひて。那件這色す／れど。馬はあながちに逡巡のみす。家司宗

友も従侍も。雨具なんど、連／ものするに。神さへ鳴て芻まどふとこ

ろに。那黒雲のうちに。怪偉もの／みゆるを覽れば。白き袍の束帯し

たるが。さも憎畏き顔色にて。葛絃／君を詔と瞭讀てうせたり。側訛

も震ひ慄かる。葛絃君は猶更魂天外／飛。馬上に堪かねて礮と踏墮。

各渾慌忙しく扶胞きて。薬水撫摩とし／ければ。苛して帰本往となり。

空も星ひとつたつみゆれば。腰輿に□③02オ

〔絵01〕③02ウ

〔絵02〕③03オ

乗まゐらせて。西鐘告后館にぞ歸着たまふ。斯て通身違例。竟夜／

煩悶苦悩たまへは。親族のかぎり集て調理れど。その甲斐なく。黎明／

畢に世を辞し。没しくなり給ふ。斬べし廿未満にて唯獨の嫡嗣なれ

ば。鬮家の呻大約ならぬ半加無離別。涙に哽も理りなり。岑守卿は

これ／すなはち。早良皇子の怨灵。我家の後あらせじとの天闕ならぬ

と。切齒も／晦氣におぼすを。自他知音漢も。さふらうといひあひて傷

をなす。葵格／式のごとく仕果て后の中陰。なにくれと當うちにも。

孫道風はありなが／ら。箕裘を嗣べき的なければ。更に一子を願告て。

佛神に授らば。よも／障礙はあるまじとて。累七日すぐる不躄。天

皇の帰依まします。奥福／寺の賢標上人を籍じ。一七日が間。便生福

徳智恵の男の。法華鐵法を／行ひ給ひ。岑守卿も求聞持の法を修して帰

□し給ふに。満願といへる□③03ウ

夜。渾家榊の上の夢に。北斗七星の衆の天罡星。地に隕給ふとみる

ほ／どに。その斗宿條四五歳ばかりの。寧馨兒と化し。徐々焉て竹

林に／入んとす。これを尾て抱き揚。汝はいづくよりきたりて。名は何

とかいふと問／ば。童子頭を回し答て。考妣なければ名もなし。丸を

愛慰撫育し給ひ／てんやといふに。榊の上頭を按て。夫に告て子とせ

んま、老早成長して／家風を與すべしといへば。かの兒點頭とみて夢

は覺にき。つとみし／起て岑守卿に夢悉譚したまへば。佛力虚しから

ずして。丸に一子を授た／まふなるべしと擇ひ給ひ。楮上人には嘲被

けておくりかへし給ひしが果／然榊の上服孕身となり給ふに。年紀は

六々にておはせば。おもひきや／まることあらんとは。されども佛神の

加護は例にもあらざるべければと。／岑守卿も愁の眉をさへ啓給ふと

ころに。延暦廿一年壬午の春正月。夢に□③04オ

看し如き琅玕を欺く。□□若君誕生まします。岑守卿はさら也。親

族／廣遁も倪なく恰びあへり。かの夢にみえし竹林の裡にて得給ひたる。

□容／に彷彿たれば。竹簇の義を執て。竹村と號給ひ。鍾愛斜な

らず。産孳も／所せく萃未れり。例に忒て肥胖魁梧におはずに。岑

守卿は他放下。ある／ときは乳始の懷るを覗て。索蕭寝たるを。あなが

ちに愛し給へば。忽□と曙暘。□とめて完余と□然さま。耐がたき

まで父は恍惚とおもひ給ふ。榊の上も／はやく健になり給ひて。兒童

を舐積給ふこと。夜日を領たず。一日々々とめ／ごましましきまでに甘心附

給ひ。匍にも起にも。通途の嬰童と一季も迅き／は。全く北斗の□身ゆ

ゑかと父母は弥齋眉たまふことかぎりなし。竹村君／は片生の黎より。

才質賢。その教諭まらせば。何にまれ微聆辨給ふ／こと。成人たるに

等じ。三歳に裏給へば。難波津浅香山を鬻舎にゆかずして□③04ウ

書給ふにぞ。最あやし／僧僕たり。各位這兒を誉称に。皇といひ。ま

た才／賢きこと。皇々たりなどいふに服。岑守卿嬉しとおぼして。竹

村を篁の字／に革給ふを。もとより篁苗の字なればなり。又嬰童の

慰にとて。後蒙のあなたに。川水を堰いれて。細き流れを設す。橋を掛小舟を浮かめなどしたまひつゝ。睦き友がき。また毎に来る儒家をも集て。□宴の席を啓き。竹樹新栽て。流水遠と題して。各位五律を賦せしむ。韻をふさぎて岑守卿。寒の字を得給ひ。竹樹新成。陰。春光始。欲。蘭。雜。花。壓。□暖。暴水撃。梁。寒々。侍女開。扉。望。親目卷。箔看。非。經。三。山。河。遠。一。即坐得。考盤。夏。夏。盤遊。しかるに水無月のころより榭の上。□青梅状迹にて。惡狎給ひけるが。右近といへる若人の婿□侍□。いと老美しく。那件と□つかふまつるゆゑ。榭の上は稀始ものとおもほして。わきて愛きこえ給ふが。家司なる」③05オ

左衛門宗友と。しのびくくに□□たる躬勢を。榭の上はこゝろひとつに察し/たまへど。かれ兩個とも緊匠がゆゑ。未覩にて過したまふ。宗友も人目の鎖情らねば。夏の夜の將曉を。有感月をさへ嫌がちなる中は。いとゞ懇切互のおもひなり。榭の上は淹しう産に隔りしが。いかなるにか。篁。君。三。歳。に。為。給。ひ。し。載。またもや□□給ひ。磐當禪臨盆て。次の春姫君産れ/給ふ。層累なればか。名を繁艸と称したまひけり。岑守卿おとひめぐらし/たまふに。篁は神佛に願たてまつりたる吉子なれば。故障なく家をも廣べしとおぼゆ。このたびの女子は。不意ければいかならんと。歎ぶ中に行末を案じたまひて。その黎名高き宿曜師に。休咎を觀たまふ。宿曜師申やう。この/姫君はいたつて婦徳ある御方なれど。御館にて養育たまはゞ。成人の/後死灵の祟に罹り。幾ならずして命を隕給ふべければ。旬日も育た」③05ウ

まふこと研て宜しからず。寧洛外に棄捐給はゞ。かへつて美麗に生たち給ひ。警ひ難に遇給ふとも。のち竟に高貴の位に□晤給ふべし。努々うたがひ/給ふべからずと。至誠にきこえければ。榭のうへ駭き給ひ。いまだ何をも/辨ぬ的を。苛無情も何として。郊街に捐たるべ

き。こればかりは許給ひねと。歎き給へど岑守卿は嫡子葛絃君の。天死したまひしに慙ておはせ/ば。愍に別涙かゝり。愛深くなりてうき目みむより。宿曜のいふに委託/べしと。榭のうへを百般にいひ論給ふ。さあらば乳母をや添て棄なん/と令す。宿曜申やう恚亦しからじ。さすれば知己の方へ。義子に遣たまふも/全じければ。免に角小野家の縁を攜てこそしかるべけれ。乳母など/附傳たまはゞ。依舊災害其身におよぶべしと。強ちにいひければ。婦情に/宿曜さへ憐たまふもうべなり。斯ては果じとつひに捐給ふべきに。こと」③06オ

鞆りければ。榭の上は。泣々如意輪觀自在菩薩の。一寸八歩なる伽羅の尊像をとり出。炭高しとて。厨子も後光臺産なども攜ち。尊像ばかりを錦に裏み。かの嬰童の頭にか。褶裳汗衫の衣などはいふもさらなり。戒。刀。を。さ。へ。把。副。宗。友。を。し。て。洛。外。へ。棄。さ。せ。給。ふ。あ。は。れ。にも静心なき業なりける。/恚麼且措或年七月の夕部。暑さの名残避がてに。岑守卿若君を伴ひ。菌に對ひ端居し給ひしが。かの細流に傍て。僅に觀る小秋の咲出たるを。若君/風と觀たまひ。今まで弄號とし居たまひし。楛だつものを打□。あの花折/來つて。父上にもせたてまつらんとて。奄綱に階を□たち。莫覓履の脚/にも合ぬ。恢やうなるを静気なく微れ。櫛髪は首のもとに搔く/ぐみながら。趨りゆかんとして。廊の方より。落散たる文をひろひ彷徨給ふに。/乳母も踵てまいり。何をか躊躇給ふやいふに。斯るもの/有しとて。□」③06ウ

かか文を父上にまゐらせたまひしは。何の思惟もおはせざりき。父は若君を/危しくと看給へど。健におはせば。物にかゝづらふことな。戯れながら夕露のそぼつも厭わず。乳母に掌を援せて。萩の根に往きわけ入給ふ。岑守卿は/若君の拾ひて徑せし文を。山の端離る/月影に。熟々覓たまへば。選示なき宗友より。侍女右近へ贈る□簡なり。岑守卿はじめと與醒給ひ。件々/を読たまへば。今更のことなし

もあらず。山の井の如あさくもなき文の面なり。／＼かゝることは、榊の上の識や否や。そはとまれかくまれ。このまゝ指貫なば全じ／＼家司舎人雜式なども迷ひて。家の猥となるべければとて。百折低頭思惟。／＼不便ながら兩個とも。長き暇をえさせずば諸まじと。涕催給ひつゝ。おもひ／＼回らし給ふ。しかるに右近は痾といひたて。荐りに暇を覗ひける。最訝み／＼おもひ給へど。無據申によつて。暇出し給ひて。市井住せし形勢を。匿に窺せし。③07オ

〔絵03〕③07ウ

榊の上／＼北斗星を／＼感じて。篁卿を／＼みごもり給ふ。③08オ

〔絵04〕

給ふに果然て案に違はず。榊の上と三月を隔て、宗友の兒を産。女子／＼きたまひしかど。かう皎甄てはそのまゝにはなしがたく。兩個とも主従／＼離断とおぼすにも。俸禄に攜て兒を養育は。難義なるべしと察し／＼給ふにつき。榊の上は捐し繁艸がこと忘らるゝ間なく□しき。あきら／＼めてはおはせども。懐空しく思す□下に。右近が産しも女なれば。繁艸の兌摠に引揚て女とせば。那們も渡世の易からん。妾も憂を慰む便と／＼なりて。両全の謀ならめと。密に守守卿にのみ談じたまひ。陰図那兒／＼を奥へ曳採給ひ。依旧自らが産し繁草と。宗友等兩個にも緊く□堅めし。唯篁が□と称へさせ給ひぬ。扱宗友右近は是非なくも。陽守なる姦通の／＼咎。永き暇に。なく／＼も。榊の上の老婆心。帛紗に裏む黄金さへ。人目もつゝみ。③08ウ

○第八回 いを□

却説桓武帝崩御ましく。安殿皇子は先年刺客のために命隕せし。故有て疾御の君也。御即位たまひ。大同元年と改元ある。然に這帝。故有て疾御位を神野／＼皇子桓武帝第二の皇子也。に□せ給ひ。寧楽の離宮へ退御給ふ。されば紀元は弘仁と更る。而して當時より百六七十載も以前。孝徳天皇の大化二年に。道昭法師。撰津国東生郡大江津に。長柄橋を造給ひしが。そのうち朽果て跟絶しを。このたび嵯峨帝弘仁三年六月。観察使を遣し給ひ。大江の岸に長柄の橋を造し給ふ。原末西のくんに。平安に通ふ船の水泊にて。大江。③09オ

多き繁華の阡陌なるうへ。這般の橋普請にて。ことさら听は賑はひけり。されば小野の家臣左衛門宗友は。榊のまへの侍女。右近との密通露頭。いときた／＼まひて故郷なれば。浮浪漢の傍どころ。浪速大江の□に。住憂茅屋をかりの宿。産業もなく暮しつゝ。平安退てはや七載。榊の上のふかき庇み。扉き楯を／＼卿の御子と。格外の恩顧。そのうへ餓糧の價さへ。居多賜ひし重恩を。日毎送／＼にいひつだし。忘るゝ

間はなかりけり。譬は豊饒に江に臨み。釣を垂など慰みし／＼も。早晚囊中虚しくて。遠き慮りなき故に。ちかき愁の幾としの。仕術尽に漂ひて。今は□曳漁舟。うき世を渉る身とぞなる。遅々たる春も。万頃の浪を潜き。緬／＼緬たる秋の夜も。漁火に眠を醒す。九夏の炎天には。皮骨を集して叫び。嚴冬の風雪は。肚裡に徹ていと懐し。かゝる稼も主の目を。竊し因果そが中に。③09ウ

も。姉は媛君と尊尚れ。この地で産れし次男佐太郎。五歳なれども丈夫に生育。夫妻の鍾愛掌の。珠とみるまで弄ける。東合□に遠山鷹蔵と／＼いふ豪富ありて。日毎に訊ひ四方八隅の。襖譚すとてはきたれども。淵底は宗友の。閨婦の右近に蟹歩なる。懸想し面貌には。深く蘊てをり／＼の黄／＼金に困窮宗友に。徹完いひて藉申へ。最懇

にきこゆれば。侑平漢におもひ居る。宗友あるひ鷹蔵に。いひ出しか  
ねしがやうやくに。両手を突て発語。いかなる縁にか今までの。厚  
き恤に罪ふかし。なほこりずまに望蜀たる。いひぎ／まにはさふらへ  
ど。識給ふごとく苦曳業も。素人なればいひ甲斐なく。妻子の口／も齷に  
足らず。熟々思惟に本意ならねど。二君に仕へ恩愛の。育乎やすく／せ  
まほしき。奉公せんとする杭時。好談は聞出したれど。身に擁纏べきも  
の／も乏。佩べき劍さへなければ黄金三十両貸たまへ。儻諾てたまは  
らば。□③10才

越憚び最究竟と。侍を繋られ鷹蔵は。そは過分のことなれど。いかん  
とも／就べきま。好仕官ならば猶更に。尋問他て違眷ぬやう。商議め  
されの／淡切に。宗友頭を席に着。返却の□は連載の。給□にて還償  
ん。何にま／れ躰やうにと。聞えてしからば紹介の。仁に其言談んと。  
鷹蔵に一禮のべ。右近にも告げて出にけり。路視送て鷹蔵は。表を鎖  
し右近にいふやう。俺／恠恒々宗友の。良かれがしと為を□ひ。紐庇を  
する縁由を。今までは匿せしが。／今烏白地にきこゆべし。そも／／  
其許予合壁へ。移住れしより朝に視。暮に／平安の娯音。姝姿なるに  
奪魂て。堪がたけれと言傍らん。便もなくて／居諸を送るに。□黎藟の  
黄金の所望。これ僥倖と無□。藉ばその／ち／幾度も。二枚三枚と度  
累る。阿□はもの坎厥金も。今は大江のこの浦／に。住も果ずて他国  
へ往。また物部になるべきと坎。さあらは俺おもひ／③10ウ  
水泡となり。金債償も程遠し。庭に霎時移栽し花。根／こしにされてそ／  
のうへに。美さへ奪しごとくなり。されば無理ことながら。情を兼引た  
まは／らば。債も責じこのたびの。三十両さへも界ふべし。しかせば宗  
友も世にいで／ん。是非とも徇ひくれられよと。切なる恋を黄金で煩。  
喚きおもひを聞／えけり。右近は聆ておほきに娯違。こは似げなしやお  
もひも紐。しかる／正なき御事は。不通におもひ絶たまひね。累てい

ひも出しさふらふなど。／最潔白に答けるを。さのみな立流にいひそと  
て。逼り沿て掌を撃つ網／繆を織はしとて。撞□ければ□公に。何調  
戯とよる佐太郎に眼瞪す鷹／蔵が。懦獎あらしや狩場の雪吹。撲て  
□し力艸。拳をもつて二つ三。打擲し／て突倒せば。唬的となきだ  
し起上る。□腕腰拏てそこらを索し。手に信せ／たる下括にて。肘臂を  
しかと擲ければ。厥子に尤はなきものをと。擱る右／③11才

近。違しくも凭服ず。冪のなきこゑやと。揮巾口に捺罩ば。声さへい  
でぬ／潜々涙。蓬の滴萩の露。すゑは波もやたちぬらん。いかに右近。  
吾に命懸なる／言をいさせておき。肯諾ぬのみならず。かへつて辱を  
あたへたり。恩を寔にて／報ずとも。手を束てや屈すべき。聆ば原未  
汝等も。平安にての密姪奸通。その天罰の酬とて。今この艱難する  
ならずや。青雲の黄金貸はさておき。これまでの肩貨に培産も副て。  
端を揃ていま請取。儻辭ならば三個とも。決断し召連ゆき。苛目み  
せんと詆詞たり。右近は霎時言語未發。千慮。碎肺肝が。諺ても黄金出  
さねば。夫の身の上起がたしと。脊をおもふは深／けれど。浅き低頭の  
鼻のさき。徐々に面をも。詞をもまた柔輒て。のたま／ふところ其理  
り。なきよしもあらず其上に。□俚妾をさほどまで。思し／たまへる  
も和理なけれど。今得まほしとの金の數。容易もあらざめれば③11ウ  
。聽済たまふやまた否やと。癡情にまどふなりと。いふに鷹蔵氣色  
をなほし。／その訝りも宜なれば。翌烏黄金齎きたるべし。しかせば儂  
いひきこゆる／こと。必然果し給ふらめと。結問は今更に。答んやう  
に言窮。逆も竄れぬ／形勢なれば。了解鞠めておもてぶせ。そは兎も  
角もなし侍らはんと。いへば／鷹蔵おほひによるこび。慌忙く佐太郎  
が。□を脱拭巾をも。□棄て肘／摩てやり。疼かりつらん耐よと。賺  
足せど唯よ／と。泣債るを抱く右近に。なほも詞を楚と釣諾。たち  
わかれてぞ帰ける。右近は佐太郎抱ながら。怒／りつ泣つ□び入。可愛

さうに鷹蔵が。この掌を絞り口にさへ。手拭入てこゝを留。さぞや苦しくありつらん。克も堪へてくれしぞや。頑智なければどこの母を。佐んとせし孝行者を。あの鷹蔵が無理非道。堪忍しやと擁抱しめ／＼たり居たり諄き泣く。□に揺震気や弛み。嗚り泣つゝ寝入しを。起し」⑬2才

もやらず套房に入。卒と寐させて裾に衣。たち退ところへ左衛門宗友。我家に還る申過。呼問もなく突といれば。妾眷帰らせ給ひしか。まつ／＼燈をと把出す。おもひは千磐やふりにたる。かみの煤けし行燈は。いつか／＼孕せし種油。絞る心を命毛に。かきたてられぬ両夫や。ふたすぢ憎き燈心／＼の。藪はで袂も朽ぬべし。今日は遠方へ往たれば肚裏も空し。まづ夕飯／＼調よと。いへど何やら渋々に。齷齪□面貌なり。左太郎ははや寝たるか。／＼風邪感冒なといふに右近。今まで諛趨りきと。いふ只熟着ていかなれば。／＼唯飄々とのし給はぬ。這みつき程月のめぐり。例に論るとはいはれずや。さ／＼らば惡垣なるべければ。葉をも服自愛たまへ。かの官途すべき談も。いま一／＼對談は。決窮はすべくなをいふも。鷹蔵が肯や否と。案じ煩ふ血色に。右近は泪潜然つゝ。厥金の眞□ならば。必おもひな屈給ひそ。鷹蔵ぬし」⑬2ウ

の首尾整と。いふて帰られさふらひしと。躬を淪ても浮脊を。忍ぶこゝろぞぞ憐なる。宗友怡びそれぎにならば。不挨拶して調はん。まづ／＼今／＼よひは艾弭せんと。臥室にこそは入にけれ。右近は生暗き。燈□さ迎ふ／＼身独りの。過去未来おもひ紹介。かう捷邁も宿世の業。主君の罰と／＼おもひしる。躬を擧ても黄金だに。夫にわたさばその場にて。玉緒／＼剪削と谷たる。叩不亂に黙顔で。奥は軒もきこゆれば。熟睡たる佐太郎を。擁抱きたりて膝にあげ。不問語の暇乞。なみだに声は曇膠で。幼稚け／＼れどもいふ言を。よくきゝわけて浪人の。産棄に鞫非義邪に。躬をしづむるも父上の。致青雲たまはんことを謨り。妾

は特 攜去遠きところへ往生／＼からに。これが陽□の顔の瞻取。疾成人して爺公に。孝行聲読書の。もの／＼学をも懈怠で。母亡ゆゑとな嬢らに。まだ聞ゆべきは海山と。全じ懸言」⑬3才

瀾然の。涕や顔に躍りけん。佐太郎わつと鳴出し。稠罕てこゝ奮し。遐き所と／＼やらんへ往たまはゞ。余をも連れてゆき給ひね。けふ鷹蔵に縛られたも。／＼公の為とおもひて。じつと耐て居ましたぞや。また鷹蔵に□らねば。／＼ならぬことなら縛れても。叩かれてもあやまりて。堪忍して貰ふべし。何卒爺公と今までのやうに。陸圍居てたまはれと。嗚る涕に執襖て。蹉跎してぞなき居たる。蔑巧知れど実意ある。そのいひざまの後や／＼さき。□は聆乘こゑあげて。応々道理なり尤なり。汝を措て何地往／＼べき。とはいふものゝ明鳥のいのち。嗚や路にて妾をば。歎き慕ふ坎不便／＼やと。おもへば涕突係きて。前後おぼえず頼れけり。往昔に更る曉／＼の。鶏は妻子の憂わかれ。急ぐとするか無しやと。左太郎抱き臥室に入。目弛もせず添臥す。夜も東方朗れば宗友は。扮整して右近に告。疾帰らん」⑬3ウ

らんとて往んとす。喃ゆき給ふか俟たまへ。これが余波といへばみに。いはねばこゝろ擾かれて。啻啻咽るばかりなり。宗友は右近の疾病。悪疽くるし／＼に。涕も盈るゝものならん。葉無間飲給へ。金調ふと大きくからき。今一／＼應往ばことなりなん。疾く歸りてよろこばせんと。いひ委いそぎ出にけり。／＼影着ぬまで門辺にたち。こゑも斬まず泣地しが。稍／＼になみだを□ひ。／＼かくては果じと気を罰焉。儂亡路の採締。遺情怨念のくさく／＼も。模形／＼を□着などするところへ。はやくも鷹蔵出末り。契約の金齋きたおりと。靡々視る懷手。いかに駕鴛鴦かと。その□嬢さの頬憎さ。かねて心は決たれど。今さら有繫懊くて。違ふ契を憾めるは。恒にしも世の効なるを。／＼現に齟齬ぬそうらめしき。いかにもして問どうせ。冀くは吾夫に。今一度遇て死／



おやと。右袖左袖□類。苛だつ鷹藏押和め。まづ跌座で聆給へ。曩に平安で」③14ウ  
鷹藏／を／人奥と／して／嘲哂す

〔絵05〕③14ウ

〔絵06〕③15ウ

古き史。読たる中の品陀記に。新羅國の賤の女が。國の騷動を避んとて。竊／て小舶に取乗つ。逃遁渡來て難波に留。其眷夫なる天之日矛。追波來て／夫婦となり。産業なくて困ぜしを。難波わたりに葛城の。高領といつるのありて。夫婦の難儀をみるに忍びず。浪□比禮。風切比禮。奥津鏡。辺津鏡。／などいへる宝を。授け遣り給ひしかば。大郎子。中津比賣といへる。両柱の神／になりにせしとかや。兎に角この難波津は。曩もかゝる人。多かるといへと鷹藏は。耳にも留ず答して。往昔はとまれ今はなく。何なりとも質なけれ／ば。寶遣るべき浪花ならず。長譚は閑話なり。俵儲たるけふこそは。□や／契約せしとほり。予足も股も煖鳥。臥處に入むと輓撃る。女もいまは却／却に。窘きいはんかたなければ。寧□にて自害せんと。懷刀に掌を把しが。回顧て否也々々。爰にて虚くなるならば。黄金は脊の擗斂じ。さらば慙」③15ウ

死のみならず。娘せる子まで黙より。懼むおもひに矯ふを。鷹藏は苛急て／この後におよびて何を諄々。倡疾々と促せば。盜立鳥の如くにて是兆も袂室／へ迪ひて。ゆかんとする厥黎に。幹事も夙々齋たるや。宗友かへりきたり／つ。なにげなく衝と入れれば。兩個侶ひ奥へゆく。その後影みて駭き。姦通／的驅て動くなど。こゑに變搔兩個の仰天。右近は倏懷劍擗持。自ら喉を刺／んとする。周章て宗友たちまにに掌をまつ抑へ劍擗把。汝みづから殺略と／するは。譯こそあらめと猶豫しつ。たとへ良品に言婉とも。えやは赦さん／譎□に。聞ゆべしと激惱

問。右近は貞をもえ搦す。毀□じて更に慙愧ければ。／言鮮も貽惟けれど。答せざれば疑憎霄まじ。鷹藏が妾に懸想して。咨詢し／言より佐太郎を。苛せしことまでの。一五一十を垂漏きこえ。□□はこの三／十兩の。金にこの躬を嘸しても。君にまゐらせまほしく。しかして後毀死なら」③16ウ

んと。覚悟を谷たればこそ。つねなき剣を持侍る。俵兼し君に今勅て。欲遣ことさふらはず。未枕閨房さねど。契りし詞は不義等均。佐太郎が／こと諄々と。怙まゐらす外はなし。□自□て殲て□べ。されくば自ら／刺なんと。縛董てみえけるにぞ。宗友殆嗟嘆して。予に黄金を遞んため。可惜命をすてんとまで。抵洩たる貞節は。感ずるにあまりあり。今は／疑ひ積たれば。殺略に暨じ憚べと。白眼砍ていひければ。さては聆念□たり／やと。右近の軟にかぎりなし。鷹藏は攔詞抵弁やうもなく。連れ出んとするに／途なく。踏躓して□乎しが。没理會て孤點頭。簞に乾たる罌牽風陰／はずれと罾の簞に。泄ともしらず息を畜。潜かへつて黙したる。宗友網に／吃と□け。こゝろ可喙啤爽係呼向吾妹けふの渙に。視押ぬもの罩に罹りたり。右近聆敢ず。そはいかなるものに斯さふらふぞ。されば外にてもなく」③16ウ

首は人。それより下は奥の貌。人魚といふものを活拘たり。世にめつらしき奥／なれば。この辺にまれ平安にまれ。人群集よる所にて。價を把てこれを觀な／ば。居多の貨殖べき坎。然ながら奚□も。肥腩て味美るべし。巨脰にて滾／りよし。朋友管待て□べしと。きくたび毎に鷹藏は。化して鴈とも作なんと。膽を銷□慄し。黙然蹲る。右近いふやう渾鱗魚に□よりは。天窓を攜背截にして。未醬藩臙はいかにさふらふ。否々脰肚を割割肉を□。熬酒／つての裁も美ん。また爰にさいはひと。懷劍あり。短刀あり。この二刃を串／となし。肉を擇き醬油の。服灸にせんものと。立んとすればたまりかね。／被し罩を

攫り脱。竄逃んとするところを。宗友□覆きは不有と。襟／双摺んで  
翻筋斗。膝に樓藉感さす。さて／勢の動き魚哉。罵食毀つて連ん  
とすれど。宗友が手に陥ては。雖論有術逸はせじ。まことにそれ  
に⑬17オ

聆ることあり。人魚の肉を喫て□ば。地仙をするといふ。吾俤親子が  
餐ん／より。寧平安へ齎往て。高貴の館へ鬻なさば。沙金百両には  
買べきと。／干般□端に嘲哂す。攻藉たる鷹蔵が□兮声を□鞠出し。  
その人魚おれ／が沽ん。宗友いふやう。這はおもひも因ざりき。茲に買  
人のあるならば。平／安へ往にも速まじ。汝、慥に百両に沽ならば。

命資てはならやらん。／鷹蔵いふやう。予かく沽んといふからは。價  
には不管ど。百両とは残り家／名なり。金十両に戻てたべ。如何な  
く／十兩や。升兩にはえも賣じ。さあ／らば升兩いだすべし。夫より実  
は沽がたし。宗友愕然さいふごとく。金／を悉て破談ずば服衣にせん。

吾妹。その串持来み。火を□せしと。悞し係／られ吁先替てたべまっ  
てたべ。高直なる魚なれど。三十兩に沽んま／。便宜了契てたべ。  
物の命を叱るは。未末のためにも良らんと。掌をあは⑬17ウ

すやら呻くやら。術なき□迹とみえにける。宗友□然と冷笑ひ。しき／  
たる膝を軋し弛め。下料かれども三十兩に。戻て放して遣べきが。人魚  
に／おいて懸にはなさじ。控換の金ありやとて。衝搦せば命苛々。あ  
りと／も／／則これと。含蓄したる三十兩。大邁の金齊けれど。□□

も是非もなく／と。財囊のま／にて投出せば。宗友採つて裡革め。把  
収つ、咬て。嗚呼命／冥加な人魚かなと。いふに鷹蔵顔色なほし。  
奸通にもあらぬを不義として。金子を扁馬しその代り。汝をかうと

拳振揚。敵と□んとする拳を□／あげ。相對究の交易に打擲されん筋  
なしと。眉間を丁ど流る、鮮血。鷹／蔵は眩暈既。欲蹶躓と逡巡。頭  
抱へて竄々と。眼をも看ずして帰りける。／鷹蔵は疵帖られ。齒切こと

限なく。笏齋の虎落めと。己が暴戻押船。喧嘩／にて痾冒れりと。  
廷尉監へ訴訟ければ。徑に宗友を召れ。敵敷鞠問⑬18オ

し給ふに。宗友黜も陽佯なく。実意をもつて白地に。答しければ。左  
右／方を暫時退せおき給ひ。隣舎郷黨の的を召れ。兩個か平常の造次／  
顛沛。委曲糾明問給へば。召れし各門申やう。鷹蔵は豪富にて。藉附

の金／銀に高利を貪り。舌叨たがるゆゑ借たるもの。産業破却するも  
の多し。／されば本名は呼ずして熊鷹々と冒名しつ。また宗友ことは  
漁して。貧けれど正□□の人物と。矣口同様に誒ければ。再四御吟

味のうへへ。儲は宗友の申条。相違なしとて三十兩の。金をも給ひ故障  
なく。御裁／許済ば宗友は。篤く禮して退きけり。また鷹蔵は貧窮人を。  
虐／上に他し妻を。姦通せんとせし罪軽からず。這によつて資財田

宅を／勘録し。鷹蔵の妻子にたまひ。鷹蔵は所追放せられける。宗友  
はおも／ふま／になりしかば。右近と佐太郎は依舊此地に住しめ。  
自黄金攜て⑬18ウ

。平安をさしてぞ登ける。かくて右近は程なく女子を産。名を下枝とい  
／へりしが。宗友は官家に俸禄。年たちてのち。妻子を平安へ呼迎ん  
とする／とき。佐太郎は成長して梶八と名をあらため。船乗ことを效

しが。馴たる拳／を離る／に忍びずして。右近と下枝は平安にのぼり。  
梶八獨這津に駐／り。船長して世をわたりけるとぞ  
それ人魚は三才図會に競なりといふ。また或説に競は穿山甲也ともいふ。其吟未は他に譲  
るべし。たゞ人間その肉を餐ば。長寿するといへど漁者恠みて捕されば長寿は却て那に

小野篁八十嶋かけ卷之三終⑬19オ

(おかもと かな 生活文化研究専攻 2年)  
受理年月日 平成 28年 9月 30日  
審査終了日 平成 28年 11月 30日